

「地域で活躍する女性たち」議事録

(開催要領)

1. 開催日時：令和2年11月14日(土)13:00～15:05
2. 場所：BSN新潟放送 本社ラジオスタジオ

3. 登壇者：

内閣官房 まち・ひと・しごと創生本部事務局 次長 武井佐代里
株式会社農プロデュースリッツ代表取締役 新谷梨恵子
蒔絵伝統工芸士／林仏壇店六代目 佐藤裕美
尾畑酒造株式会社専務取締役／「真野鶴」五代目蔵元 尾畑留美子
株式会社ハピキラ FACTORY 代表取締役／
慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 特任助教 正能茉優

(プログラム)

1. 開会挨拶及び施策説明
「今後の地方創生の方向性」について
武井 佐代里
2. 講演①「私の起業体験～好きを仕事にする方法～」 新谷梨恵子
2. 講演②「家業を継ぎ、新たな道を」 佐藤裕美
2. 講演③「サステイナブルな酒造りを目指して」 尾畑留美子
3. パネルディスカッション
ファシリテーター
正能茉優
パネリスト 新谷梨恵子
佐藤裕美
尾畑留美子
4. 閉会挨拶

*敬称略・順不同

司会：

お待たせしました。これより「地域で活躍する女性たち」ライブシンポジウムを開催させていただきます。

このライブシンポジウムは、内閣府によるW i t h コロナ時代の施策として、『未来に向けて、知る・変わる・守る』をキーワードとした広報事業「チームNEXTステップ」の一貫として、47都道府県で幅広いテーマにより開催されているものです。

本日は、ここ新潟のBSN新潟放送ラジオスタジオと東京のサテライト会場から「地域で活躍する女性たち」をテーマに、講演とパネルディスカッションを通じ、女性活躍の事例の紹介や活躍のための環境づくりなどについて考えてまいります。

それでは本日のご出演の皆様をご紹介申し上げます。

講演の講師、そして、パネルディスカッションでパネラーを務めていただきます株式会社 農プロデュースリッツ 代表取締役でいらっしゃいます、新谷 梨恵子様です。

新谷：新谷です。よろしくお願いいたします。

司会：

よろしくお願いいたします。

そしてお隣、蒔絵伝統工芸士であり、林仏壇店六代目としてご活躍の佐藤 裕美様です。

佐藤：

佐藤です。よろしくお願いいたします。

司会：

よろしくお願いいたします。

そしてもう一方尾畑酒造株式会社 専務取締役であり、「真野鶴」五代目蔵元の尾畑 留美子様

尾畑：

尾畑です。よろしくお願いいたします。

司会：

よろしくお願いいたします。

そして、パネルディスカッションでファシリテーターを務めていただきますのは東京の会場にいらっしゃいます株式会社ハピキラ FACTORY 代表取締役であり、慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 特任助教であります正能 茉優様です。

正能：

よろしくお願いいたします。

司会：

よろしくお願いいたします。

本日は以上の皆様とシンポジウムを進めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。
なお、皆様のプロフィールについては、のちほどご紹介させていただきます。

そして申し遅れましたが、本日の司会を務めさせていただきます表 佳世と申します。何卒よろしくお願いいたします。

さて、本日はYouTubeでのライブ配信ということで、国内はもちろん、海外からご視聴の方もいらっしゃるかもしれませんね。ということでオープニングではここ新潟の魅力をたっぷりご紹介できるビデオをご用意させていただきました。

新潟と言いますと、おいしいお米、お酒、そしておいしい水がぱっと浮かぶと思いますが、ビデオの中ではそれ以外の魅力についても紹介させていただいていますので、ぜひこちらをご覧ください。

司会：

もちろんこれ以外にもまだまだ魅力はたっぷりありますので感染予防をしながら多くの方々にこれからも新潟に遊びに来ていただければ幸いです。
では次に内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局武井佐代里次長より開会のご挨拶を申し上げますと共に今後の地方創生の方向性についてご説明させていただきます。

1. 開会挨拶及び施策説明

武井：

ただいまご紹介いただきました、内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局次長の武井と申します。

皆様におかれましては、日頃より地方創生に関する施策の推進にご理解・ご協力いただき、ありがとうございます。

今日は、シンポジウムのテーマに関連して、「女性活躍」について、その施策の位置づけや内容の説明、また、女性活躍を応援する自治体の取組の先進事例の紹介をさせていただきます。

近年、特に女性の東京圏への転入超過が増えていることなどを踏まえると、地方創生の観点からも、地方において女性がいきいきと活躍できる環境を整備することが重要と考えております。新型コロナウイルスの影響を踏まえ、オンラインにて開催させていただきますが、最後までお付き合いいただきたいと思います。

今日は、大きく二つのことをお伝えしたいと思います。

一つ目は、日本の人口や人の移動に関して、データで確認をしつつ、地方創生に関する目標や施策の基本的な方向性をまとめた「第2期まち・ひと・しごと創生総合戦略」についてご説明します。二つ目は、今日のシンポジウムのテーマである、女性活躍について、国としての支援、地域における実践例についてご紹介します。

日本の人口などの状況ですが、棒グラフは人口、折れ線グラフは高齢化率を表しています。総人口は、右から4つ目と3つ目の間の2008年がピークで、2019年は9年連続の減少、2019年は約1億2600万人となっています。

折れ線グラフにあるように、高齢化率は2019年に28.4%と、過去最高水準まで高まっています。

出生（しゅっしょう）に係る動向ですが、青い棒グラフが出生数、赤い折れ線グラフが合計特殊出生率です。出生数は、右端2019年には86.5万人と過去最少にまで減少しています。過去のベビーブームと比較すると、約6～7割の減少です。合計特殊出生率は、2015年に1.45まで回復しましたが、その後は低下し、2019年には1.36と減少しています。

東京圏への人の流れについて見てみます。東京圏への転入超過、つまり入ってくる人と出ていく人との差ですが、増加傾向にあり、2019年は全体として14.6万人の転入超過です。年齢別に見ると、10代後半から20代、グラフの青色・緑色・黄色のところですが、転入超過の大半を占めています。

先ほどの東京圏への14.6万人の転入超過を男女別に見てみると、右端、赤い囲みの部分ですが、2019年は男性が6.4万人、女性は8.2万人です。かつては、男性の方が東京圏への転入超過数が多い傾向にありましたが、冒頭でも申し上げたとおり、最近の傾向としては、女

性の転入超過数が男性を上回っています。

男女別の東京圏への転入者数、転出者数もそれぞれ見てみます。3つのグラフのうち、左が転入者の人数、真ん中が転出者の人数、右が転入超過数です。男性の場合、転入者と転出者ともに多いのですが、女性の場合は、転出者が少ないことが分かります。このことから、「女性は転入しても戻らない」傾向があると考えられます。

今まで見てきたように、少子高齢化により人口減少が急速に進行している中、東京圏への一極集中の傾向が続いています。若い方を中心として、地方から東京圏に人口が流出していることなどにより、地方における人口、特に15～64歳の生産年齢人口が減少しています。

これらの人口減少、東京圏への一極集中を踏まえ、2019年、昨年12月に閣議決定した「第2期まち・ひと・しごと創生総合戦略」は、地方創生の施策に関する政府としての戦略をまとめたものです。「将来にわたって活力ある地域社会の実現」と「東京圏への一極集中の是正」を目指し、地方創生に取り組むこととしています。

この「目指すべき将来」に向けて、第2期総合戦略では、下の図にあるように、4つの基本目標、2つの横断的な目標で構成されています。

まず、基本目標については、「基本目標1 稼ぐ地域をつくとともに、安心して働けるようにすること」、「基本目標2 地方とのつながりを築き、地方への新しいひとの流れをつくること」、「基本目標3 結婚・出産・子育ての希望をかなえること」、「基本目標4 ひとが集う、安心して暮らすことができる魅力的な地域をつくること」となっております。

これに加えて、第2期総合戦略では、新たに「横断的な目標」として、縦書きにあるように、女性を含む「多様な人材の活躍を推進する」こと、地域におけるSociety5.0やSDGsの推進といった「新しい時代の流れを力にする」ことを位置づけたところです。

女性活躍の推進は、様々な分野にかかわります。女性の東京圏への転入超過が増大している状況を踏まえると、例えば、①地域において、女性にとってもやりがいのある仕事をつくるという観点からは「基本目標1」、②地方への移住等を応援するという観点からは「基本目標2」、③仕事や家庭に関する希望に応じて、結婚・出産・子育てしやすい環境を整備するという観点からは「基本目標3」がかかわってきます。

次に、女性活躍の推進に向けて、内閣官房や内閣府が行っている施策と、地域における活用事例についてご紹介いたします。

まず、中長期を見通した持続可能なまちづくりのため、地方創生に資する地方自治体による持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向けて、取組を推進しております。具体的には、SDGsの達成に向けた、優れた取組を、「SDGs未来都市」として選定するとともに、その中でも特に先導的な取組について、財政的な支援を行っています。

SDGsの17の目標の一つとして、「ジェンダー平等を実現しよう」というものがありますが、「SDGs未来都市」として選定された福井県鯖江市では、ジェンダー平等、女性活躍推進を柱とした取組を行っています。女性活躍に関する世界発信、女性活躍に向けた意識啓発、活動拠点の整備などに取り組み、女性のエンパワーメントを引き出し、子どもや男性、地域のエンパワーメントにつなげて、地域のブランド力を高め、魅力ある雇用を生み出すこととされています。

2019年4月からは、地方へのU I Jターンによる若者・女性等の起業や就業を推進するため、地方創生推進交付金により支援しております。移住を伴う就業の場合、最大100万円、移住を伴う起業の場合は、最大300万円を支給するものです。この移住支援事業がきっかけとなり、長年住んでいた東京を離れ、サポートが充実した自治体へ移住・就業されている例もあります。

このほか、地方における就業については、現在職に就いていない女性・高齢者等の掘り起こし、企業の職場環境改善や業務プロセスの見直し支援、働く意欲のある方と企業のマッチングなどの一連の取組を、官民連携プラットフォームの下で行う都道府県の取組に対して、地方創生推進交付金の「新規就業支援事業」により支援しています。

続いて、地域における女性活躍に向けた取組事例を2つご紹介します。

群馬県前橋市では、主に若者と子育て中の女性を対象とした就職支援や、仕事と子育ての両立に向けた支援を地方創生推進交付金を活用して行うことにより、市内企業での女性の活躍につなげています。具体的には、「ジョブセンター前橋」において、就職後の定着支援などを総合的に実施するほか、企業が事業所内保育施設を新設する場合に、ベビーベッドやベビーチェア等の備品購入に係る費用を、一部助成しています。この取組などにより、事業所内保育施設新設企業における女性採用数が、平成30年度に77人となり、目標値を大きく上回る成果が上がっています。

また、大阪府においては、製造・運輸・建設業界の3分野で、女性・若者の活躍の場を創出するべく、業界団体を中心とした連携体制の構築や、企業への職場環境整備と魅力発信のためのプログラム提供を、地方創生推進交付金を活用して行うことにより、女性活躍につなげています。ご紹介いたしました事例を含め、全国では様々な素晴らしい取組が進められています。

女性が中心となって地方で起業する、事業を継承する、やらなければいけない仕事ではなく、やりたいと思う仕事、面白い、楽しいと思える仕事、それに取り組みされること、地方や地域を思う方々にとって勇気を与え、また、さらには地方創生の原動力になっていくと思います。また、女性の活躍の形は様々ですが、仕事・地域・家庭で、女性が輝くことができる

ということは、その地域がとても魅力があるということと大きく関係していると思います。それぞれの地域で女性が活躍できる環境づくりに向けて、今後とも取り組んでまいります。

以上をもちまして、私の説明とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

司会：

女性の転出の傾向が多いようですね。地域で女性が輝く、それによって地域も輝く、そんな時代になっていたらいいなという気がいたしました。今日は、そんなお話も伺えるかもしれませんが、ここからはシンポジウムを進めさせていただきます。

まずは、まさに地方で活躍、新潟で活躍されている3名の女性から、それぞれの事業についてご講演をいただきます。

2. 講演「私の起業体験～好きを仕事にする方法～」

司会：

まず最初のご講演は、株式会社農プロデュースリッツ代表取締役でいらっしゃいます、新谷梨恵子様です。新谷様は東京都のご出身ですが、ご結婚を機に新潟県小千谷市へIターン。小千谷の地で出会ったさつまいもをきっかけに株式会社農プロデュースリッツを起業。新潟県初の6次産業化プロデューサーとして、農家の新商品開発や販路開拓などをサポートしていらっしゃいます。2017年には、「女性起業家大賞」最優秀賞を受賞。「マツコの知らない世界」にさつまいもマニアとして出演されるなど、元気いっぱいの活躍を続けていらっしゃいます。それでは、新谷様、よろしく願いいたします。

新谷：

よろしく申し上げます。

では、私の起業体験「好きを仕事にする方法」という話をさせていただきます。

最初に自己紹介をさせていただきます。私は、東京の江戸川区というところの出身でして、15歳のときから農家のお嫁さんになりたいなと思っていたので、東京農業大学国際農業開発学科というところに進みました。そのときからさつまいもで町おこしをしたいという思いがあったのですが、東京農業大学に行けば農家の息子さんに出会えるかなどと淡い期待を抱いていたのですが、実際に私は農家のお嫁さんではないのです。主人は全く違う仕事をしているので、それならば私は自分で農業をしようと思い、10年間農業法人で仕事をしていました。今から5年前に独立、起業し、現在、大学2年生の息子、高校2年生の息子がいる4世代の7人家族の嫁としています。

では、農業法人時代の話させていただきます。農業法人時代にさつまいもでスイーツを作っていたのです。まず、さつまいもプリン、スイートポテト、さつまいも饅頭など作っていたのですが、これを学校の給食に出したいという夢がありまして、県内の学校給食に営業し、何とか新潟県内上中下越の給食に採用されるようになりました。最初にこのさつまいもで町おこしをしたいと言っていたときから、「いいね、さつまいもで町おこしはきつとうまくいくよ」と言われたわけではなく、「さつまいもで町おこしなど無理だよ」と、最初は言われていました。それでも、私はこのさつまいもというものをテーマにし、何とかこの小千谷市を盛り上げたいという思いがあり、起業しました。

いも、いも、いもと言いつづけたおかげで、入社5年でこの会社で専務をさせていただきました。今も書き続けているのですが、10年以上、ブログを書いているのです。「さつまいも愛」で検索すると、何と私が出ると。そういった活動をしていたおかげで、何とかいもが少しずつ普及してきたかなという思いがあったのですが、そのときから、県内のいろいろな農家さんが相談に来るようになったのです。

農家さんの悩みとは何だろうと。自分が実際に農業法人で働き、私自身農家ではないので非農家出身で働いたこの経験が活かせないか。これからの農業界で求められていることはどんなことかを真剣に考えるようになりました。

その中で、私の中で不安がたくさんありました。それは、新潟県にさつまいものイメージが全くないということ。まず、起業するときに、何かテーマを決めたときに、その地域の特産になっている、そういったものであれば、もう少しスムーズだったのだと思うのですが、小千谷市はさつまいもが有名な場所ではなく、全くイメージがない場所です。その中で、畑も田んぼも持たずに起業するということが、果たしてうまくいくのか。そういったことへの不安はたくさんありました。それでも、私は、将来いつかこの場所でお店をやりたいと思っていたので、やってみようと挑戦をしました。

私の仕事を説明します。私の会社は、今、大きく分けると五つの仕事をやっております。さつまいも農カフェきららというお店をやっているのですが、多分、一般のお客様は、私をカフェのオーナーだと思っているのです。その中では、いらっしゃいませと接客をしているのですが、実はそれ以外に「農家の営業代理店」、「6次産業化プランナー」、「アグリネット芋づる」と「きららベジファクトリー」という五つの仕事をしています。これはどういう仕事かというと、農業法人時代に悩んでいたこと、農家さんからの悩みの中の一つに、1年間雇用する難しさ、冬の仕事のなさです。夏の時期は忙しいのだけれども、冬になると暇な時期ができてしまう。そういった農家さんの悩みを解消するために、今、米農家さんやすいか農家さん、えだまめ農家さんなどに人材を派遣する仕事もしています。

そしてもう一つ、6次産業化プランナーというのはどういう仕事かということ、1次生産者、2次加工、3次販売です。この一連の仕組みのことを6次産業化というのですが、この仕組みを農家さんが全部やってくださいということではなくて、この仕組みを作ることが大事なのではないかと思ったのです。ですので、私の今のプランナーという仕事は、農家さんが作ったものをどうやって形にして、どうやって売るかというお手伝いをしています。商品開発だったり、販路拡大だったり、アドバイスをしたり、実際に一緒に活動をしたりしています。

それ以外に、私が一番多く扱っているのは、規格外野菜というもののなのです。ですので、規格外の野菜、傷がついたり、曲がったものをカットしたり、ペーストにしたり、こういった形でカットしたりしているのが、きららベジファクトリーとなります。

私の思いがあります。「野菜に罪はない」と思っています。規格というのは人間が決めたものであって、まっすぐでも、曲がっていても、みんな同じではないかという思いがあるのです。カットしたり、ペーストにしたり、そういったことをすることで販路がある。何とかこの子たちを形にしたい、そんな思いがあって私はお店をやっているのです。このさつまいも農カフェきららというのはどんなお店かということ、これだからこうじゃなければいけないということはない。そんな思いを形にしています。例えば、パフェといたらいちごが載る。いもでもいいじゃないかと。3種類のさつまいもを使えばいもでもできる。なぜお誕生日ケーキなど、ケーキはいちごが載るのだろう、いもでもいいじゃないか、そんな思いでケーキを作ったり。なぜバレンタインはチョコなのだろうと思ったのです。バレンタインにさつまいものトリュフでもいいではないかと思って、こういったものを考えたりしています。それには思いがあります。

それは、私の手は2本しかない中で、やりたいことがどんどんさつまいもをテーマにして広がっていったときに、全部私がやってしまう、マカロンを作ったり、ケーキを作ったりしてしまうと、限界がある。でも、地域のいろいろな方、お菓子屋さんやパン屋さんやそういった方とコラボすることで、どんどん可能性は無限大になるなと思ったので、このお店はその思いを発信する場所として作りました。

そして、伝えたいことがもう一つあります。世界初、焼きいもの上にガンジーソフトクリームというものが私の名物です。こちらは下の部分がほかほかなのです。ほかほかの焼きいものにソフトクリームを載せる。これを考えたのは、小千谷に人を呼びたいなと思ったからなのです。いつもだったら、この下のほかほかの焼きいもを試食にしたり、ぜひこれ食べてみてくださいと皆さんに持ってきたりするのですが、これはポイントがあるのです。下の部分が温かい、上が冷たいということで、載せると溶けてしまう。ですので、小千谷に来ないと食べられませんよということテーマにして、これを考えました。これをきっかけにいろい

ろな方がこの焼きいもソフトクリームの写真を撮って発信してもらいたい。そんな思いがあって、これを考えました。

これから起業したり、これから仕事をしていきたい。そういった方に伝えたい思いがあります。頑張り続ければ、いつかつまずいた石にさえも感謝できる日が来る。成功の数より失敗のほうが多い人生だと私は思っています。まずさつまいもをテーマにした段階で無理だよとか、やめたほうがいいよとか、そんなことも言われました。ですが、そういった思いがあったから、私の中でこれを絶対にやりたいという思いがあったから、そういった声を絶対に乗り越えてみようと思えたのです。ですので、そういった声があったり、きっと難しいのではないかと周りから批判することがあっても、その言葉に感謝できる日がいつか来ると思います。

人間の脳みそは思い込みが 85 パーセントという言葉聞いたのです。起業してから5年間は、私のテーマは「悩まない」、「気にしない」、「持ち越さない」、とにかく愚痴を言うことも、へこむことも一晩だけにしようと思っています。

それはなぜかという、やはり起業して自分で仕事をする。経営者になってからいろいろなことに悩んだり、立ち止まったりすることが多くなったような気がしたのですが、そんなことをしていると、本当にもったいないと思ったのです。自分の頭の中をさつまいもでいっぱいにすることでわくわくして、新しいアイデアが浮かんで来て、こんなことをしたらどうだろう、こんなことができるのではないかと考えられるようになったので、変えられるのは今でこのとき、自分なのだということに気がきました。

そんな私の燃えたぎる思いを書いたのが、次になります。実は、2017年「女性起業家大賞」最優秀賞というものを頂きました。これは自分にやってきたチャンスです。そういった変化に挑戦すること、そしてだれかと共同してコラボして挑戦すること。これが大事だと思いました。そして、いつか何かしたい、多分いろいろな方が思っていると思います。いつか何かをしたいと思って、何かのために自分を磨いている。資格を取ったり、勉強に行ったり、いつか何かをしようと思っている方はたくさんいると思います。でも、いつかはやってこないのです。向こうから手を振って歩いてくるような気がしましたが、やってこない。それに気付いたので、私は自分からチャンスをつかみにいける人になりたいと思っています。

そして、過去の栄光は未来への約束ではないと感じました。農業法人時代、さつまいもでプリンを作ったり、お菓子を作ったりしているとき、これがゴールのような気がしていたのですが、そのときの栄光というのは未来には決して何の役にも立たない。常に前を向いて、新しいことに挑戦していかなければならないと気がきました。

そしていろいろなことをしている中で、悔しいこともたくさん経験します。でも、きっと

その悔しいという経験は、自分のバネになって、そして、何かやりたい、こんなことをやるのだという希望が自分の背中を押してくれるのだと思っています。

その中で、この先、私の中のテーマとして考えるのは、今の自分に足りないものではなくて、未来の自分が欲しがるものをイメージしながら仕事をしています。それは、今、足りているからいいではなくて、どんな未来になっていきたいか、どんな自分になっていきたいかということ考えたときに、そのときの自分が喜ぶ、未来の自分が褒めてくれるようなものをイメージしながら、今のこのタイミングで何をすることが必要なのか。そういうことを考えています。

起業前の私に言いたいこと、そしてこれを見てくださっている、これから起業したい、地域でこんなことをしたいと思っている方に伝えたい言葉があります。それは「大丈夫です。起業ってすばらしいと思います。きっと楽しい未来が待っている。」こんなことを伝えたいと思います。女性で何かしようという思いがあるときに、今で大丈夫なのかな、いつやろう、いつかできるかな、そんな思いがあると思います。でも、やると決めたら、覚悟を決めたら、きっとそのように動いていくので、楽しい未来が待っていると思いついていただきたいと思います。

調子に乗った私は、なんと名刺もいも型にしまして、願いも叶うというテーマで消しゴムを作ったり、いものイヤリングを作ったり、小物を作ったり、楽しくいもの人生を歩んでいます。

最後になります。私の思いです。私に出会ってくれたすべての方に感謝。小千谷で起業できたことに感謝。私の思いは、「さつまいも」をテーマにして、さつまいもを基にいろいろな方に恩返しができるような人生にしたいと思っています。

ご清聴ありがとうございました。

司会：

ありがとうございました。チャレンジすること、そしてやり続けることがとても大切なのですね。さらには、何より好きなことで起業するという、これは本当に理想的な形だと思いました。今日もさつまいもへの愛、たっぷり頂きました。ありがとうございました。

2. 講演「家業を継ぎ、新たな道を」

司会：

続きましてのご講演です。蒔絵伝統工芸士林仏壇店六代目としてご活躍の佐藤裕美様です。佐藤様は、新潟市出身。伝統的工芸品の指定を受けている新潟仏壇の蒔絵師でいらっしゃる

ます。この蒔絵と言いますのは、金粉、銀粉などで漆器の表面に絵模様をつける日本独特の漆工芸技法の一つです。佐藤様は、仏具だけではなく、蒔絵ネイルや風神雷神などをモチーフにしたZippoなども手掛け、蒔絵の可能性を広げていらっしゃいます。また、子育てをしながらイラストレーターとしても活躍されている一面をお持ちです。

それでは、佐藤様、よろしくお願ひいたします。

佐藤：

よろしくお願ひします。しゃべるのがあまり得意ではないので、読む感じになりますけれども、よろしくお願ひします。

私は、佐藤裕美と申します。新潟市出身で実家の林仏壇店を継いで、蒔絵と呼ばれる伝統工芸の職に携わっています。また、学生時代から活動しているイラストも続けています。そして、3児の母です。私の仕事については、「匠の手」というプロジェクトでご紹介いただいた動画を見ていただくと分かりやすいかもしれません。まずはそちらをご覧ください。

新潟県の伝統工芸品は16品目あるのですが、そのうちの一つ「新潟白根仏壇」のところを私が担当させていただきました。こちらはお仏壇の仏様の上がる一番上の段になります。そこに蒔絵を施しています。そして、今、金粉を蒔いているところです。漆で書いた唐草に金粉がつき、はっきりと見えてきます。仏壇には各種の段があり、その上面に蒔絵の装飾を施しています。ベンガラと漆などを混ぜ合わせ、この漆で蒔絵を書いています。このような感じでいつも制作しています。

林仏壇店の歴史は古く、1830年創業、私は六代目になります。写真は昭和38年の林仏壇店です。丸惣、これが林仏壇店の屋号です。代々、惣の字を襲名してきました。初代惣二郎、二代目惣太郎、三代目惣二郎、四代目惣太郎、そして五代目の父が芳弘。父から世襲制がなくなり、六代目の私裕美と続きます。私の屋号は「惣（MONOCOCORO）」、先代からの「惣」の字を襲名し継承しつつ、私は「惣（MONOCOCORO）」として独立、起業しました。襲名した惣の字を上「物」と下「心」に分けて読みました。二つの意味がありまして、物づくりの心と物を大切に作る心という思いを込めています。

先代からの仏壇店を受け継いだ私ですが、もともとデザイン専門学校に通っていて、その傍ら、実家の仏壇業を手伝っていました。卒業後は、そのまま実家の仏壇店を手伝っていましたが、並行してイラストレーターの活動もしていました。でも、実は小さいころから絵が大好きだった私は、東京で絵の仕事をしたかったのも、仏壇業はやりたくなかったのです。当時は、古風な蒔絵の柄など、あまり興味がなく、もっと新しいことをしてみたかったのです。

まずは、基本的な基礎から学んだうえで、それから自分なりに蒔絵をアレンジしてみました。師匠である父と母、ネイリストである妹とともに蒔絵ネイルを制作したり、こちらは右が市松模様や直線が多くかっこいい仕上げとなっています。左が花や曲線が多く柔らかな仕上げとなっています。

そして、たまゆらりんというおりん仏具に焼き付け技法を用いて絵付けをしたり、ちなみに焼き付け技法は金属に対して描くときに、剥離しないためにする技法です。私が描いている仏壇にはこの技法を使わないため、父と独学で15年かけて習得しました。そして、蝶は古くから亡き人の魂や精霊を浄土に導くと伝えられているので、モチーフを蝶にしました。右はオーダーメイドで長岡花火も作りました。大阪の堺打刃物という伝統工芸品とコラボしたり、お酒を注ぐと宇宙が広がるおちょこやタンブラーを作ったり、地元新潟漆器井村勝さんのもみじの飾り盆の上にさらに蒔絵でもみじを重ねたりしました。先代から受け継いだ伝統工芸ですが、私なりに楽しみながら、その可能性を広げています。

今は仏壇業を楽しみながら日々励んでいます。もちろんこれまで順風満帆だったわけではありません。女性であり、妻であり、母であり、六代目であり、イラストレーターでもある私には苦難も多くありました。そして、今日に至るまで大きな二つの転機があり、そのおかげで苦難も乗り越えてきたのです。

まず一つ目の転機です。皆様、膠原（こうげん）病という病気をご存じでしょうか。自分の免疫が自分の細胞を敵と見なして攻撃し続ける病気です。全身に障害、炎症を生じるさまざまな疾患の総称で、人によって症状も違います。原因は不明、そして現在、完治することのない病気です。2011年3月、初の個展中に私は膠原病を発病してしまいました。当時は、手も腫れ、筆を持つこともできない状態に加え全身がすごく痛く、倦怠感としびれで個展もままならない状況でした。あるときは、いつも抱っこ、抱っこと言っていた当時2歳と3歳の子どもたちが、私の荷物をお母さん持ってあげるよと言ってくれたり、だ液が出にくい病気なので、のどが渇いてしまい苦しいので絵本を読んであげることもできず、本当に申し訳ない思いでした。薬も効かず、痛みを耐える毎日で、この生活がいつまで続くのだろう。回復はできるのかと目の前が真っ暗で、当たり前の日常がどんなにありがたかったかとひしひしと実感しました。心の中で、もう一度、手を動かせるようになったら、ずっと絵をかき続けていようと以前にも増して強く思いました。

そんなとき、デザイン専門学校の恩師から240色の色鉛筆をプレゼントされました。もう一度、個展をやってみたらとエールを頂いたのです。恩師から勇気をもらい、病気と闘いながらも1年後に再び個展を開くことができました。膠原病はずっとつきあい続けなければならない病気ですが、少しずつ自分でも病気とつきあい、寛解と再燃を繰り返しながらも、生

活をうまくコントロールし、何とか無理せず保っています。恩師からの色鉛筆でかいたイラストです。テーマは「愛」でモデルがわが子です。本当にこのポーズで寝ていました。そして、このイラストが、個展でも一番人気がありました。

個展の再開をきっかけに、さまざまな活動にもチャレンジし始めました。お子さまの手形を基にイラストを完成させる手形アート、親子ワークショップなども実施しました。このときは、まだ体調も安定していなかったもので、イベントの予定は心配しながらも入れていました。よし、今日もできた、その一つ一つの積み重ねでクリアしていました。恩師の作品展に声をかけてくれて、蒔絵のアクセサリーを展示させていただきました。私の活動も、県内で注目いただくようになり、取材がきっかけで地元テレビ局のアナウンサーさん愛用のギターにも蒔絵を施すことに。いろいろと蒔絵をご紹介いただく機会も増え、これは冒頭で紹介した匠の手プロジェクトで撮影をしていたときの様子です。今でも、この帽子を被っている監督さんには、ことあるごとにアドバイスを頂いています。

そして、二つ目の転機は、何と言ってもこれです。LEXUS NEW TAKUMI PROJECTに参加させていただいたこと。全国で50人の匠が選出されて、新しい作品を生み出し、発信することに参加させていただいたのは2018年。実は、2016年から推薦を頂きましたが、あえなく落選。翌年も推薦を頂きましたが3人目を妊娠中で断念。そして、2018年、仏壇業も、家事も、そして3人の子どもの育児も、まだ下の子は6か月と小さく、チャレンジすることは難しいかとあきらめていました。そんなとき、当時12歳の長女が私にこう言ったのです。「お母さん、やりたいんでしょう。やったらいいじゃん。私が家のことをお手伝いするから。」と。私はその言葉に勇気づけられ、チャレンジすることになりました。

しかし、参加してからが大変。仕事、家事、育児をしながら六代目の顔、母の顔以外に妻の顔もあります。夫の義母からは、結婚当初、毎朝、必ずお弁当づくりを欠かさないことをお願いされていました。これは心に決めてずっと守ってきました。プロジェクトも一から構想しプレゼン。通っても考えを実現するのにいろいろな方の協力を仰ぎ、それを販売できるところまで作ることが本当に大変でした。そして、できあがったものが「宙COCORO(そらこころ)」です。

こちらが私の代表作ともなった宙COCOROです。酒どころ新潟なので、酒器の制作をしました。日本酒をおちょこに注ぐとき綺麗な宇宙が広がります。蒔絵師なのに筆を置き、違う素材で抽象的な絵付けをするという新しい試みでした。そして、焼き付け技法を用いて、絵付けをしては焼くという作業を何度も繰り返し、奥行きを出しました。この作品が国内だけではなく、海外にも届き、反響を頂きました。また、ツイッターでもいわゆるバズってしまいました。最新作の宙COCORO花火は、今年9月三越伊勢丹の新潟越品リニューアル

オープンにて、越品限定品として作り、実演販売をしました。

宙COCOROがきっかけで私の蒔絵人生も大きく変わりましたが、もっといろいろなチャレンジをして、蒔絵の可能性を広げていきたいと思っています。

二つの転機を基にお話しさせていただきましたが、最後に、苦難を乗り越えた二つの転機は、恩師と娘のひとことで勇気づけられて、今につながっています。恐縮ですが、私から皆様に微力ながら、何かのきっかけになればとメッセージさせてください。

やりたいことは、どんどん口に出して、周りにも言い続けること。そして、いろいろ挑戦し続けること。すると不思議と応援者が現れます。私一人では何もできなかったのですが、たくさんの方のいろいろな方に助けられて今があります。私もそうなのですが、夢中になって無理をしてしまいます。何でもかんでも一人で抱え込まないで、助けを借りて分担していくことを私は学びました。最近、子どもたちが家事を手伝ってくれます。洗濯物をたたむこととお皿洗いどちらがいい？早い者勝ちだよという、率先して手伝ってくれます。これはおすすです。下の子の面倒もよく見てくれます。主人も家事に協力的になりました。家事も終わり、子どもを寝かせて夜一人になるとき、やっとまた仕事ができるのですが、たまには寝坊してしまいますけれども、だれよりも遅く寝て、お弁当の準備でだれよりも早く起きるということで、家族も自然と私を助けてくれるようになったのかもしれない。「母親は子育てをすることが一番だから、趣味の絵は子育てが終わってから始めればいいじゃない。」と言っていた義母も、今は応援してくれています。

環境は人それぞれいろいろありますが、それを受け入れ、やりたいことに一生懸命向き合い、努力していると、応援してくれる人がやってくるし、導いてくれる。やりたいことを頑張りすぎるとつぶれてしまうので、周りに助けを求めて分担する。それがずっと続けていくことにつながり、大きな成果につながっていくと考えます。だから、やりたいことがあったらあきらめないで挑戦してみてください。

いろいろありましたが、この道を選んで本当によかったと思っているし、絵を描くことは私の生きがいであり、命です。どこかで私の制作した物を手に取り、その方に喜んでいただけることが本当に何よりの幸せです。いつ、どうなるか分からないので、今を大切に、今できることを一生懸命に。まだまだ未熟な私からのエールではございますが、新潟で活動する女性の皆様に少しでもお役に立てたら光栄です。ご清聴、ありがとうございました。

司会：

いろいろな苦難があったということですがけれども、周りのサポートもありながら、本当にたくさんの方にチャレンジなさっていることがよく分かりました。そして、伝統的であり

ながら、新しい蒔絵のスタイル、世界をどんどん広げていただきたいと思います。ありがとうございました。

4. 講演「サステイナブルな酒造りを目指して」

司会：

では、最後のご講演です。尾畑酒造株式会社専務取締役であり、「真野鶴」五代目蔵元の尾畑留美子様よりご講演をお願いいたします。尾畑様は、新潟県佐渡市のご出身、慶應義塾大学卒業後、東京での映画会社宣伝部勤務を経てふるさとの蔵を継ぎ、2女をご出産。2014年から佐渡の廃校を仕込み蔵として再生させた「学校蔵プロジェクト」をスタート。2020年「The Japan Times Satoyama Awards」大賞を受賞されました。現在、蔵元として忙しい日々を送っていらっしゃいます。

それでは、尾畑様、よろしくお願いいたします。

尾畑：

よろしくお願いいたします。

こんにちは、佐渡から参りました、尾畑留美子と申します。佐渡島で真野鶴というお酒を造っている尾畑酒造の五代目になります。本日は、短い時間ですが、よろしくお願いいたします。

早速ですが、皆さんは正確に新潟にはいくつ酒蔵があるかご存じでしたか。新潟県には国内最多の88蔵の酒蔵がありまして、地酒王国と呼ばれてきました。佐渡島には、そのうち五つの酒蔵があります。東京23区の1.4倍、人口は約5万3,000人。東西南北それぞれ特徴ある自然環境、歴史、文化に多様性がある、日本の縮図と呼ばれている島です。この地で尾畑酒造は1892年より酒造りを続けてきました。

幼少期の私は、島が窮屈に感じてしまって、世界の旅番組や映画雑誌を見ながら、外の世界にあこがれて過ごしました。小学校の文集では、将来の夢として、世界を紹介するジャーナリストになりたいと綴っていました。私は、二女として生まれましたので蔵を継ぐ気はなく、大学を卒業した後は映画会社に就職。主にアメリカ映画の配給宣伝をしておりました。世界を紹介するジャーナリストにはならなかったのですが、映画を通して外の世界を紹介するという仕事を選んだのも、何かやはり共通するものがあつたのかと思います。就職した会社は自由闊達で、新しいことに挑戦することを歓迎する社風がありました。就職していた7年の間には、海外からプロモーションのために来日した映画俳優が、やっと決めた雑誌インタビューの取材中に勝手に帰ってしまって大騒ぎになったりと、数え切れない失敗をしまし

たが、そのときの上司は、失敗は挑戦したことの証だと言ってくれ、その後の私自身の仕事に対する姿勢に大きな影響を与えました。毎回、新しい映画に向き合って、刺激いっぱいの日々でしたが、28歳のときに転機が訪れます。

1994年、父が病で入院。ふだん元気いっばいの父が病に伏し、急に死というものが身近に感じられました。そして、自分に問うたことが、もし明日、地球がなくなるとしたら、人生最後の日に何をしたいということでした。答えは意外なほどすんなり出ました。それは、自分の蔵でうちのお酒を飲みたいなということでした。それが分かってからは早かったです。蔵に帰ろうと決めて、当時、出版社で働いていた男性と結婚して、一緒に佐渡に渡りました。ちなみに、父は今でも健在で、主人は今、会社の社長をしております。1995年10月に帰郷した当時の佐渡は、子どものころに育った島とは違って、人口減少や少子化、観光の衰退、まさに都会と地方の格差を表していました。そして、日本酒の市場も縮小の一途で、全国の出荷量は1973年のピークに比べて約3分の1ほどになっていました。

そんな状況の中で、うちではほとんどの蔵が廃止した、仕込み期間泊まり込みの酒造りというものを今に至るまで続けています。戻ってから2人の女の子を出産し、子育てと仕事をこなしていましたが、実際はどうにもうまく行きませんでした。理由は、子育てと仕事の両立が難しかったというよりも、東京と同じつもりでやろうとしていたせいだと思います。父親とも仕事のやり方でたびたびぶつかり、東京から帰ろうと思ったときには、根拠のない自信でいっばいだった私も、いろいろなことが嫌になって、何度も逃げ帰ろうと思いました。けれども、帰郷して5年目のある日、気がつきました。仕事も会社も変えられなかった。でも、まだ一つだけ変えられるものがある。それは自分だということです。それからは、外に出て販路を見直したり、日本酒業界のほかにもネットワークを広げていきました。一つ何か動けば、すぐではなくても何か次につながっていく。そんな手ごたえを少しずつ感じていって、仕事も波に乗るようになって、それにつれて周りの自分を見る目や反応も変わってきました。

次なる挑戦は、ずっとやりたかったこと。それは海外への輸出でした。当時、日本酒は東京の大きな商社や貿易会社を通して輸出するというのがほとんどでした。そんな中で、私は現地ローカルのパートナーと直接仕事をしたいと思っていて、アメリカならアメリカ人、シンガポールならシンガポール人のインポーターというように考えていました。小さな無名の蔵が何を言っているのだと。無理に決まっているじゃないかと言われ続けましたが、何とかパートナーも見つかっていき、現地に赴いてパートナーや販売先にお酒の品質の高さを一生懸命説明していきました。実際、お酒の評判はよかったです。でも、正直、なかなか売れませんでした。八方塞がりだったときにある機会が訪れました。

2007年、イギリスで開催されている世界最大のワイン鑑評会で日本酒部門が新設され、そこに出品した弊社のお酒がゴールドメダルを受賞したのです。受賞者が参加したアワードディナーで、私は11の受賞酒を次々とテイस्टィングできるチャンスに恵まれました。そのときに感じたことは、品質を超えた個性でした。どんなところで造っているのだろう。その背景を知りたくなるようなお酒ばかりでした。そのときにやっと分かったのです。お酒の品質が高いのは当たり前。伝えるべきは個性で、その個性は生産地にあるだろうと。

酒造りには、三大要素と呼ばれるものがあります。「米」、「水」、「人」です。私たちは、その三つにお酒をはぐくむ生産地である「佐渡」を加えて四つの宝の和をもって醸す「四宝和醸(しほうわじょう)」という言葉造って酒造りのモットーとして掲げるようになりました。それから、私たちの酒造りは少しずつ変わっていきました。

佐渡のシンボルといたらトキです。佐渡には現在450羽を超える野生のトキが空を舞っています。農家の皆さんは、このトキが住む環境を守るべく、低農薬低化学肥料での米作りを進めています。一定のルールに則って栽培されたお米は、「朱鷺と暮らす郷(さと)づくり」認証米に指定されます。弊社の契約農家のお一人相田さんは、加えて佐渡の加茂湖で養殖している牡蠣の殻を使った牡蠣殻農法というものを行っており、ミネラルを田んぼに引くことで、健康で高品質なお米を作っています。当社はそんなお米でお酒を仕込むことで、島の地域循環を知ってもらおうと思いました。

また、佐渡は2011年、日本で初めて世界農業遺産に指定されました。その風景を感じられるのが400年の歴史を持つ昇竜棚田です。昨年春、農家の方にこの棚田を維持することがいかに困難で大変か、次世代に引き継ぐことが難しいかということ聞き、棚田米を使って日本酒を仕込むことに決めました。継続的に棚田米を購入して、日本酒という形にして、棚田の物語とともに多くの人に届けることで、持続可能な地域づくりを少しでもお手伝いしたいという思いからです。これらのお酒は、海外の方にも受け入れられています。佐渡ならではの地域性が伝わることで、お酒を飲んだ人たちが生産地を訪れるという流れも出てきました。そんな日本酒を私は生産地の物語を伝える語り部と呼んでいます。

佐渡ならではの取組みということをはじめた私たちの次なる取組み。それは酒造りのさらなる可能性に挑戦した第二創業的なものです。海を見下ろす丘の上に建つ木造校舎。136年の歴史を持ち、日本で一番夕日がきれいな小学校と謳われながら、少子化のため2010年に廃校になってしまった西三川小学校です。この美しい景観にたたくむ校舎を何とか残したいと私たちは思いました。私たちができることは何だろう。それは酒造りでした。この廃校を第二の酒蔵として再生させることに決め、多くの困難も正直ありましたが、2014年、廃校は学校蔵としてよみがえりました。

学校蔵は、四つの柱で運営しています。一つ目はもちろん酒造り。本社で冬にお酒を仕込んでいますので、こちらではそれが終わった4月から9月にかけてお酒造りをしています。夏で暑いのですが、仕込み部屋は冬のコンディションを作っています。オール佐渡産を掲げており、使用のお米は佐渡産米です。

二つ目は、環境との共生。酒米が佐渡産ならば、酒造りのエネルギーも佐渡産にすべく、太陽光パネルを設置し、再生エネルギーを取り入れています。このサステイナブルな酒造りへの挑戦は、東京大学の未来ビジョン研究センターと共同研究をしているところです。

三つ目は、交流です。さまざまな交流事業を行っていますが、代表的なことが、毎年6月に一日限り行っている学校蔵の特別授業というものです。前述したように、佐渡は課題先進地ですが、見方を変えれば課題解決機会の先進地でもあります。同じ島国である日本の課題解決のヒントが見つかる島ではないだろうかと思ったのが始まりです。残念ながら、今年はコロナで中止にしましたので、昨年の例をご紹介します。

「佐渡島から考える、人が減ってもできること」をテーマに四つの授業を行いました。参加者は島の内外、高校生から70代まで多世代の人たちが約120人。私は学級委員長の役割です。いろいろなバックグラウンドを持つ人たちが集まり、授業は笑顔にあふれています。この特別授業の特徴は、その多様性にあります。授業を進めていると、そこかしこで化学反応が起きていることが分かります。化学反応とは「気付き」で、気付きがあれば、発想が変わる。発想が変われば、アクションが変わる。アクションが変われば、明日が変わります。すなわち学校蔵の特別授業は、未来を変える特別授業なのではないかと考えています。そして、授業に参加した佐渡の高校生たちが、将来、島をさらに元気にしていく原動力になってほしいと願っています。

最後の柱が学びです。学校蔵では弊社の蔵人が酒造りを行っていますが、加えて酒造りを学びたいという人を、1週間通っていただくことを条件に受け入れています。仕込み1本につき三段仕込みのあるタイミングを中心に、1週間3人から4人受け入れています。どんなことをしているか30秒にまとめましたので、ご覧ください。

朝8時過ぎ、蒸し米から始まります。蒸したてのお米の粗熱を取る。それから、室という場所で麴米を作る。また、テイスティングの授業もあります。本社も見えていたり、田んぼにも行っていただきます。1週間後は卒業式です。

ご覧いただいて分かるように、外国の人も多いです。昨年はトータル10名の参加者のうち、実に7名が海外からの参加者でした。皆さん1週間、酒造りを学ぶ中で、お米を触り、田んぼを訪ね、水がどこから流れてくるのか知っていきます。長期滞在なので、まちの人との交流も生まれます。このプログラムの目的は、日本酒だけではなく、佐渡島のアンバサダ

一を生むことです。わずか7名とはいえ、各7泊ですので、49泊分の佐渡体験があります。将来は仕込みを増やしていったら、通年、行えるようになれば、最終的には156人1,092泊の学び旅を提供することになります。

この体験プログラムの特徴は、遠くて長い滞在になるため思いの強い人が集まること。酒造りはチームワークのため、初日からそれぞれの役割があり、お客さんではないこと。酒造りを学びながら、同時に地域を学んでいること。おもてなしというよりは、日々のお裾分けをするため、よそゆきではない島や蔵の日常に触れてもらえます。佐渡のファンになる人も多いです。移住という展開も当初より目指していたのですが、実は昨年6月に、このプログラムに香港から参加した女性が今年の2月、パートナーを伴って佐渡に移住したといううれしい事例も出てきました。今後も、そういう人が増えるのではないかと考えています。

また、酒造りを通して、人の成長に寄与し、地域資源の循環につなげることで、サステイナブルなお酒造りをやっていくことを目指しています。持続可能な酒造り続けることで、地域の成長にわずかでもお役に立てればと思っております。これらの取り組みにより、今年の5月、学校蔵は内閣府の日本酒特区第1号に認定適用されました。また、9月にはThe Japan TimesのSatoyama大賞を頂きました。とは言え、私たちだけが何か特別なことをしているとは考えていません。全国各地にある酒蔵は、それぞれ地域とともに持続すべく、さまざまな活動をしています。このような受賞を通して、そういった酒蔵の役割を知っていただく機会にもなればうれしいと考えています。

今、オンラインが発達して、どこにいてもいろいろなことができるようになりました。それは、とても便利です。でも、私は酒造りに関しては「佐渡でもできること」ではなく、「佐渡だからできること」にこだわりたいと思っています。そして飲み物としての日本酒を超えて、日本酒が地域の価値を増やす存在となっていけるように、さらに活動を深めていきたいと思っています。

これから、地域に移住したり、地域で起業を考えている女性たちには、あなただからできることが必ずあるはずだと。それを信じて挑戦していただきたいと思います。

当社の社訓は、「幸醸心（こうじょうしん）」と言います。お酒を醸すことで、多くの幸せを醸していければと思っています。

最後になりますが、私たちの蔵のことを動画でご覧いただければと思います。

ありがとうございました。

司会：

地域を活かした酒造りというものが、その魅力につながっているのですね。そして、学校

蔵は非常に話題になっていますけれども、この学校蔵を育てることが、その地域を育てることにつながるということがとても印象的で、地方創生につながる気がしてまいりました。

5. パネルディスカッション

司会：

さて、新潟のBSN新潟放送ラジオスタジオと東京のサテライト会場から、地域で活躍する女性たちをテーマにお送りしていますライブシンポジウム、ここからはパネルディスカッションを進めてまいります。

パネルディスカッションでは、地域で女性が活躍するために必要な環境づくりや課題などについて考えてまいります。では、パネラーとファシリテーターの皆様をご紹介します。

まずは、パネラーに今ほどご講演を頂きました、株式会社農プロデュースリッツ代表取締役新谷梨恵子様です。続きまして、蒔絵伝統工芸士林仏壇店六代目佐藤裕美様です。そして、尾畑酒造株式会社専務取締役真野鶴五代目蔵元の尾畑留美子様です。

そして、ファシリテーターは、東京会場にいらっしやいます。株式会社ハピキラFACTORY代表取締役であり慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科特任助教であります正能茉優様です。正能様は、慶應義塾大学総合政策学部在学中の2012年「小布施若者会議」を創設し、その後、ハピキラFACTORYを創業。現在は大手人材会社で働きながら株式会社ハピキラFACTORYの社長も務めているパラレルキャリア女子でいらっしやいます。ハピキラFACTORYでは、地方にある魅力的な商材を女性、若者目線でのプロデュース・発信や、地域の商材のブランディングや販路の開拓を行うなど、地方の応援者としてご活躍されていらっしやいます。さらには、内閣官房「まち・ひと・しごと創生会議」最年少委員を務めるなど、多方面からの地方創生にかかわっていらっしやいます。

それでは、ここからの進行は、ファシリテーターの正能様、お願いいたします。

正能：

よろしく願いいたします。

今日は、そちらに伺いたかったのですが、このような状況下で東京からとなりました。直接やりとりできない違和感は少しありながらも、テレビ電話でお話するような感じで皆さんとお話しできたらと思っています。よろしく願いいたします。

本日は、「皆さんにこんなことを伺えたら」ということをいろいろ考えてきたのですが、皆さんのお話を伺って聞きたいことがあふれてしまいました。「こういうことをもっと伺いた

い」ということをメモしながら先ほどのご講演を伺ったので、お一人ずつ、いろいろとお話を伺えればと思っています。

まず、最初のテーマですが、地域で事業を始めるということを決断できたきっかけについて、もう少し迫ってお話を伺わせてください。まず、新谷さんからお話を伺いたいのですが、新谷さん。さつまいもがすごく大好きでここまで活動されてこられたというお話を伺って、すごく楽しそうだなと思う反面、もし私が結婚し、パートナーと一緒にどこかへ行ったとしても、そこへ一緒に行って事業を始めるというところまでは決断できないと思うのです。自分のよく知らない場所で事業を始めるという決断ができるまでに至った経緯はどういう感じだったのでしょうか。

新谷：

私も、正直言うと起業までいくとは思わなかったです。20年前に小千谷へ嫁いだのですが、友だちがゼロ人、一人も知り合いがいない中だったので、まずは人脈づくりだと思ったのです。最初からうまくいったわけではなくて、最初は豆腐屋さんで働いていたのです。豆腐屋さんで働いたり、地域の町おこし団体にお世話になったり、いろいろな活動に顔を出すようにしたのです。でも、私も言い続けたのです。いもでやりたいと。さつまいもでやりたいと。言い続けていたら、いろいろな人が私を応援してくれて、いいね、さつまいもがうまくいくよということではなくて、何かやりたいという私の思いをいろいろな方が応援してくれました。ですので、今から5年前にそのチャンスが来たときに、小千谷市という、そこで起業したいと思いました。

正能：

ありがとうございます。もう少し踏み込んで伺いたいのですけれども、そのとき、小千谷市という地域への思いはあったのですか。

新谷：

あります。

正能：

それはやはり5年間の中で築いてきた人間関係への思いということなのでしょうか。

新谷：

起業するまでは15年です。15年あったのですが、私は友だちがゼロ人だったときから、いろいろな方が私を応援してくれて、人脈ができていく中で、すごくいい場所なのです、新潟の小千谷市は。とても魅力がある場所なのですが、冬、豪雪地というイメージが強いのです。冬の小千谷はあまり人が来ない。おまつりがあったり、イベントがあったり、そういうときにたくさん人は来るのですが、それ以外の平日だったり、冬場という、やはり人があまり来ないのです。でも、冬の小千谷もいいですよ。冬もいいし、一年に何回も来ると小千谷のファンになってもらえるのではないかと思います。私のお店は小千谷インターのすぐ隣、入口のところにありますが、私がいも、いも言い続けて、それがきっかけで小千谷に1回、来てもらいたいなと思ったのです。1回来て、2回来て、3回目くらいにはファンになってもらえるかなと思って、今、お店をやっています。

正能：

なるほど。私自身もふだんは長野県の小布施という町で活動しているのですが、私自身はもともと小布施と、縁もゆかりもなく。初めて大学の紹介でおじゃましたのをきっかけに、そこから小布施の町と人が大好きになってしまって、10年ほど活動させてもらっているんですが、よく周りの方から、なぜ小布施のことがそんなに好きなのと聞かれるのです。私自身もまだ上手に言葉にできていないところがあると思うのですが、新谷さんにとって、小千谷という場所はどのような存在になるのでしょうか。

新谷：

私にとって、小千谷市はとても温かいところです。雪がたくさんある冷たい冬のイメージがあると思うのですが、肌で感じる田んぼだったり、山には山菜がたくさんあったり、秋のきのこだったり、私は農業という職業の場にいたので、それを常に感じていられたのだと思うのです。1年を通じて、そして食卓で四季を感じる事ができる。人が温かくて、町全体のみんなが親戚みたいな、温かい雰囲気が私はとても好きだなと思っています。

正能：

今、新谷さんのお話を伺って、地域そのものと最初は関係がなくても、関係性を築いていく中で、思い入れだったり、好きだなという気持ちが育っていったりして、それがきっかけでまた地域と関係を築いていって。そんな形で事業を興していくに至るということもあるのだと改めて思いました。ありがとうございます。

正能：

次に佐藤さんに伺いたいのですが、1830年創業の家業を継いでいくことのプレッシャーを私なりに考えながら、お話を伺っていました。もしも私だったら、家業の外に出て、絵を描くほうにいつてしまいたかったと思ってしまうと思うのです。そういった中で、やはり家業にとどまってついでいこうと決断できたと思った瞬間、あるいは決断のきっかけをもう少し深く伺えればと思います。

佐藤：

私は長女で、妹がいるのですけれども、両親はうちで仕事をしていたので、その姿も見ていましたし、私が保育園のときに工場が全焼し5,000万円の借金を抱えて、父親が頑張って立て直したということ、そのときは分からなかったのですけれども後から聞いたり、母が35歳のときにくも膜下出血で倒れて、今夜が峠と言われたのですけれども、頑張って回復し、今、母は蒔絵師で父が塗師なのですけれども、二人の姿を見てきて、私が絶やしたくないという思いでやりました。

正能：

そういったご決断をされたときに、ご家族や地域の方々はどのような反応をされたのですか。

佐藤：

デザインの専門学校に通っているときに、学校を休んで仏壇の仕事を手伝ったり、配達などを手伝っていたので、組合の人などにはすごく可愛がってもらいました。まだ若いときだったので、一生懸命頑張っているねと、仏壇組合の人にすごくよくしてもらって、楽しく活動ができていました。

正能：

やはりご家族だったり組合の方々だったりの人のつながりというか、こういう人たちを大切にしていきたいなといったところが生まれたというのはすごく大きいことだったのでしょうか。

佐藤：

仏壇業は年々需要が少なくなり、仕事も少なくなっている中で、跡継ぎが絶えてきて

いる状態なので、私ができるなら頑張っていきたいという思いです。

正能：

私のできるなら頑張っていきたいという想いについて、もう少し伺いたいです。そう考えたときに、ご家族がやられていたものをそのまま引き継ぐということだけではなく、佐藤さんは、新しいチャレンジをいろいろとされています。その辺りはこういった気持ちでご決断したり行動したりされてきたのでしょうか。

佐藤：

本当に絵が好きなので、仏壇の仕事が終わった後ももっと描きたかったので、とりあえず自分の携帯に描いたり、アクセサリを作ったりしていたのです。それをたまたま目に留めた友達が、「私のも描いて」みたいな感じで描いたり、仏壇業が終わってからも、新しい店舗の壁に絵を描きに行ったり、とにかく起きている間は1秒でも絵を描いていたかったので、楽しくてやっていたので、両親もそのことには賛成して応援してくれていました。これは仏壇の仕事ではないから違うよではなくて、好きなことをどんどんやりなさいと言ってくれていたのでやっていました。

正能：

なるほど。起業したいとか、新しいことを始めたいと思う人の多くは、夢中になれることをまずは見つけるみたいところに、すごく苦しむのではないかと私は思うのですが、佐藤さんが絵を描くということにそこまで気持ちを深く持っていったことについて、何かきっかけはあったのでしょうか。

佐藤：

小さいころから、絵を描く仕事に就くと決めていて、それが1回仏壇にいったときは嫌だったのですがけれども、仏壇もイラストも同時にやってみようと思った瞬間に仏壇業が好きになって、イラストで描く絵も蒔絵にしたりとか、蒔絵で描いた絵を、例えばCDのジャケットなど、全く新しいジャンルの、バンドCDのTシャツとか、イラストも蒔絵もお互いに引き立て合っているような感じです。

正能：

へえ、小さい時からの思いだったんですね。佐藤さんのお話を伺って、その時やりたかつ

たことも大切にしたらあんなに素敵な作品ができているのだと思うと、やりたいことや仕事を、必ずしも一つに絞らないことによる可能性の広がりを感じました。

次に、尾畑さんにお話を伺いたいです。「島が窮屈に思えた」というお話をされてましたよね。そのような思いの中で東京にこられて就職までされて、それでも「うちの蔵でうちのお酒を飲みたい」と思われて戻る決断をされた。この決断の大きさにまず驚きましたし、さらには、先ほどのお話の中でさらっとおっしゃっていましたが、パートナーの方も一緒に戻ったというお話にもビックリしました。男女を区別してお話ししたいわけではないのですが、やはり一般的には男性が決断したことに対して女性がついていくということはある一方、女性が決断したことに対して男性がついていくということはまだまだ一般的ではないようにも思います。そのあたりのご決断をお二人でどのようにされたのか、お聞かせください。

尾畑：

私は小さいときは蔵で遊んで過ごしていたので、実際、酒蔵自体は嫌いではなかったのです。私は次女だったので継がなくていいことになったということもあって、もともと外を見たかったので外に目を向けようと思い、出ていったと。それが、父が病気になり、父が病気になったから帰ろうと思ったのではなく、そのときだれも継ぐ人がいなくて、父が病になって、これは大変だから帰ろうということよりも、自分が最後の日に何をしたいかと考えたら、小さいときの原風景がよみがえってきて、それに気がついてからは気になってしょうがない。こんなに気になるのだったら自分がやったほうが早いと思って帰ろうと決めたのです。

そのときに結婚することになる男性に、帰ってお酒を造ろうと思うという話をしたら、一緒に行ってお酒を造ろうと言ってくれたのです。実は最初私は、やめたほうがいいよと言ったのです。酒造りも大変だし、離島へ外から来るのも大変だし、今の仕事の出版社がいいのではないかと思ったのです。ただ、彼自身は実は、親戚が長野の造り酒屋であり、彼自身の小さいころの思い出に酒蔵のある風景があったので、ものづくりに興味があると言ってくれました。それであれば一緒に行こうかと。一緒に来てから、決断がどうだったかというのは、正直、私は聞いていないのですけれども、ただ、戻ってからのいいことは全然なくて、5年間、毎日、帰りたいとぐずぐず言っていた私に、主人が、今帰ったら負け犬になると。そう言われたときに、この人は帰らないのだと。それで自分の覚悟が決まった感じです。

正能：

素敵なパートナーシップですね。社会で活躍している女性のパートナーというのは、それぞれ全く違う世界でご活躍されているというパターンももちろんありますし、尾畑さんのよ

うに、一緒に事業を作っているご夫婦やカップルもいらっしゃいます。ご夫婦で一つの事業に取り組んでいくことについて、お二人でやっていてよかったと思うときはどういったときですか。

尾畑：

作り上げる喜びというのがあります。逆に、いいときも悪いときもあるわけで、悪いときというのは家の中でお酒の話をするのも嫌という時期も正直ありましたが、そういったことを乗り越えて、お酒っていいよねということ、未来に向けて二人でいろいろな想像をしながら、いろいろなプランを語り合えるようになってからは非常に楽しくなってきましたけれども、そこに至るまでは正直、時間もかかったし、大変でした。

正能：

乗り越えられて、今はそうしたお話をできること、すごく素敵ですね。最初のテーマでは、地域で事業をされているきっかけについてお三方からお話を伺いましたが、地域のお話以上に、人に結びつくお話を伺えたのが印象的でした。地域で起業するからといって、必ずしも最初から地域に思いがあるということは必要なく、家族が大事とか、そこでお世話になっている方が大事、組合の方が大事など、自分なりの理由が場所だけではなく、人にあるんですね。

ここからは、2つ目のテーマに入り、女性という存在にフォーカスしてお話を展開していきたいと思います。女性として地域で活動していく、あるいは事業を起こしていく中で、女性だったからうまくいった、あるいは前に進んだのではないかと思えたことはありました。先ほどの順番とは逆で尾畑さんから伺わせてください。私の勝手なイメージなのですが、酒蔵というのはどちらかというと、男性が多い社会なのではないかと感じています。そのような環境の中で、女性であることはやりにくいのか、はたまた希少性が高いと思われてやりやすいのか、いろいろと考えたのですが、女性として今の事業をやられている中で、これはよかったと思うことはありますか。

尾畑：

おっしゃるとおり、業界に女性は非常に少ないです。特に海外の人などは女性というだけで名前を覚えてくださることもあるので、そういった意味ではメリットはあったのではないかと思います。やりにくかったことというのは正直思いつかないのです。それはなぜかというと、少なくとも業界の中では男性か女性かということよりも、その蔵を代表する蔵元かど

うかという立場があるので、それが女性か男性かということはあまり関係ないのではないかと。

佐藤さんも私も家業があって、結局、継ぐことにしたのですけれども、最初のデータで、女性は東京に行くと言ってこないというお話がありました。実は戻ってこない女性の何割かは地方で家業をやっているのではないかと考えています。少子化で女の子しかなくて、継がないと行って出て行って、そのまま帰ってこない場合もあるのではないかと。データを見て、それはもったいないと考えています。地方で起業もどんどんしてほしいし、同時に家業がある女性は、戻って家業を、佐藤さんのように違う風を入れながら、あるいはプラス第二創業のようなことも含めやっていくような社会になったら、ダブルで効果的ではないかと思っています。

正能：

確かに、家業を継ぐというと、先祖代々受け継がれてきたものをまるごとつないでいくものかと勝手に思い込んでいましたが、今日、尾畑さんと佐藤さんのお話を伺っていると、そうではなくて、自分の考え方や時代の新しい風をどんどん取り込んで行って、形を変えていく。そういった家業の継ぎ方もあるということを知れただけでも、家業を継ぐというのは必ずしも堅苦しいことではないという意味で、私としても発見でした。

尾畑：

旧態依然としているというイメージがありますけれども、逆に、百何十年の歴史があると、次の100年をどうしようと、けっこう未来志向なのです。そのために今何をやっていこうかと。それを重ねて今があるので、佐藤さんのお話もよく理解できました。女性には、家業を継ぐという部分にもう一回注目してほしいと思います。

正能：

ありがとうございます。尾畑さんにもう一つ伺いたいのは、女性の蔵元ということで注目されるといったお話があったと思うのですが、それはすごくうれしいことである反面、女性としてフォーカスされることもまた、引っかかる場所もあるのではないかと私は考えています。そのあたりはどのように考えられていますか。

尾畑：

正直、何とも考えたことがないのです。やはりパーソナリティだと思います。各々が持つ

ているパーソナリティには必ず、女性だからとか男性だからというものは組み込まれていると思うので、そこら辺は全く意識をしていません。

正能：

なるほど。私自身は大学生のときに長野県小布施町に入らせてもらったことをきっかけに起業したのですが、女子大生だからできたことだよねと言われることもあって、私自身も自分が女子大生だからいろいろやらせてもらっていることも自覚していたわけです。だから、女性であることと自分のやっていることを紐づけて言われることが気になる時期があったのですが、少しずつ自分でできることが増えていくにつれて、女性だからといわれることを少しずつ前向きにとらえられるようになりました。その先にあるのが、今、尾畑さんがおっしゃったような、これも一つのパーソナリティだと思えることになるのではないかと思います。

次に、佐藤さんにお話を伺います。女性ならではのメリットを感じられることはありますか。

佐藤：

私は、仏壇とイラストの活動をしているときに、あえて子育て中のママさんたちと一緒にイベントをするときは、漆をやっていることは言っていないで、手形アートの人です、イラスト描きますみたいな感じで出ているので、そうだったの、そんな仕事をしていただけみたいなことで、私が関わらせていただいた方に漆を広めることができたり、逆もそうなのですけども、小さい子を抱えているママさんで、活動したい人がすごく多いのです。子どもがいるからできないではなく、子どもがいるけれども、子ども連れてイベントをいうのを多くて、今、新型コロナウイルス感染症の関係で、なかなかそうはいかないのですけれども、やる気のあるママさんたちと一緒に数年イベントをしてきた中で、私は子どもが大好きだったので、保母か絵を描く仕事をやりたかったのです。子どもたちの手形をとってアートにするのですけれども、何か月後、1年後くらいにも大きくなった姿を見せに来てくれて、なんか楽しいなど。漆の仕事も楽しいし、イラストも楽しいしという感じです。伝統工芸のほうは年配の方が多く、若い方はあまりなくて、私は若いほうなので、年配の方と接することができますし、イラストは小さい子たちと接することができます、幅広く楽しんでいる感じです。

正能：

今、お話を伺っていると、女性という存在はもしかすると男性以上に社会でいろいろな顔

を持っているのかもしれないですね。働く一人の女性として、妻として、母親として。それも、だれの母親かによっても顔が違うと思いますし、それぞれのコミュニティで見せている顔が違って、だからこそそんな様々な入口の中で最終的には漆のお仕事のお話までできるということは、男性とはまた違うチャンスの広がり方があるのではないかと、伺っていて感じました。

ちなみに、お仕事関係以外の方に、あとから、実はこういうお仕事をやっているというお話をしたときに、周りの方はこういった反応をされるのでしょうか。

佐藤：

テレビに映って、手形アートの人が漆をしているみたいな感じで、私からはあまり言わないのですけれども、いつか知ってもらえたらいいなという感じでした。

正能：

おもしろいですね。入口が全然違うところで知り合って、最終的にはそういったことも知ってもらって、興味を持ってもらえるというのは、本当にお仕事の可能性が広がりますね。

次は新谷さんのお話をお聞かせください。新谷さんのプレゼンを伺っていると、新谷さんのコミュニケーション力というか、人とのつながりを作る力というか、何と表現したらいいかわからないのですけれども、新谷さんという存在そのものがビジネスの可能性を切り拓いてこられたのだなという感覚を後輩ながら抱いています。ご自身としては、こういうところが人との関係を築いたり、ビジネスを展開していったり、地域との関係を作るうえでうまくいったポイントだと思うところがありますか。

新谷：

私が最初に働いた地元の小さなスーパーで、小千谷弁を一生懸命覚えたことも大きかったのではないかと思います。トイレに小千谷弁用語を貼って、小千谷弁をおぼえようと思い、今思うと全然うまくはなかったのですが、なるべく地域のおじいちゃん、おばあちゃんと小千谷弁でおしゃべりをしました。よく、「お茶飲んでいけや」と言うのです。私が東京にいたころは、人の家に上がり込んでお茶を飲むなんて滅相もないと思っていたのですが、あるとき、同居の義理の母にその話をしたら、そういうときは、「ちょっとあがっていこうかな」と言う可可愛られると言ってくれたのです。

「お茶飲んでいけや」といわれて家に入っていくと、漬物を出してもらったり、地域の食べ物を出してくれて、食でつながっていったというということもあるのです。「お茶のみごっ

つお」というのは何ていいのだろう、地域が温かいということあって、道を歩いていても、知らないおじいちゃんが私のことを知っているとか、最初、それが嫌だったときがあったのです。なぜ私のことを知っているのだろうと思ったのですが、今は逆に、よく分からない人でも声をかけてくれる人はすぐに友達。後からだれ？と聞かれても、よく分からないということがありますが、皆さんが温かく声をかけてくれることは、すべて前向きにとっています。

正能：

ありがとうございます。お話をうかがっていて、私も小布施町に行き始めたころは、道で知らない人にあいさつされるのが恐かったのを思い出しました。知り合いでもないのに、なぜこんにちほと言うのだろうと。自治会のお祭りのお手伝いに行ったりするときも、なぜこの地域に関係ない私が、知らない地域のお祭りのお手伝いをしているのだろうと不思議に思っていました。今となっては、こうしてできた人間関係の中で、いろいろなチャンスが広がっていったと思えるのですが、一方で、女性が知らない人に話しかけられて、恐いなとか、行く勇気がないと思う感覚もまた、すごく自然なことではないかと思っています。だからこそ、それが活動のしづらさみたいなところにつながりかねないと思うのです。そういった中で、どうして新谷さんは小千谷の方々のお誘いを受け入れることができたのでしょうか。

新谷：

今、振り返っても、小千谷の方たちのおかげだと思えるのです。最初は、ん？と思ったり、私はそんなつもりがなくても、標準語は冷たいと言われたこともあります。丁寧に話せば話すほど、あなたの話し方は冷たく感じると言われたときに、きっと私なのだなど。私が変わらないといけないのだと。とにかく相手の懐に入るようにしていかなければいけないと。私がいる農業界も男性が多い社会です。男性が多い中で、今から十何年前、私の法人時代は「農業女子」という言葉が流行って、すごく可愛がってもらって、いろいろな会に連れてってもらったり、イベントがあったら売り子をさせてもらったり、そういう経験をしたときに、女性目線やよそ者の目線が役に立つのだなど。そういう考えもあるのかと言ってもらったときに、私が何気なく思っていることが、地域の方にとっては当たり前なのですけれども、私にとってはこんな素晴らしいことはない。こんなにおいしいものはどんどん伝えたほうが良いと思えるようになったのです。

正能：

大変なことや悩まれていることはもちろんあるけれども、最終的にそういった決断ができて行動できる、ある意味の強さがあるからこそ、女性らしさというものがうまく地域の中で生きてくるのではないかもしれませんね。

ここからは、3つ目のテーマにいきます。これまで伺ったメリットの話とは逆に、ここからは、地域で活動するときに困っていることや課題について。皆さんがお話しされている中でお子さんの話が出てきたり、ご家族の話があったりしましたが、そういったことも含めて、女性が事業を起こす、女性が何か新しいことを始めていくときに、もっとこうなったらいいのにと思うことがあれば、伺いたいと思います。

まず、佐藤さんに伺います。ご自身の病気のお話や、ご家族のお話がありましたが、最終的にはご家族がすごく応援してくださっているというところが、印象的でした。さらには、応援してくれている家族がいるからといって全部丸投げというわけでもなく、佐藤さんご自身もお仕事をされながらお弁当作りをされている。そんな絶妙なバランス感というのは、様々な苦悩がある中で、ご家族含めていろいろな人と前向きにやられているうちにできたものだと思うのですが、もっとこうなったらいいのとか、こういうことがあったらもっと楽に今の形にできたのにとすることはありますか。

佐藤：

小さい子がいるうちはどうしても大変なのですけれども、私はイベントや仕事の打ち合わせなどにも子どもを連れていっていたのです。それを見て子どもたちも絵が好きになりました。娘は本当に絵が好きで、蒔絵師を継ぎたいと言ってくれたときもあったのですけれども、今は違う目標があるので、それはそれで応援しています。いつか、やりたいと言ったときは教えようと思うのですけれども、困ったことは、やはり家事が大変です。母親というのはこんなにやらなければいけないのかと思うときはあります。

正能：

そうですね。そう思われている中でも、もうひと踏ん張りできる根っこというのはどこにあるのですか。

佐藤：

本当に喜んでもらえるのです。SNSというのはすごく、私が作った「宙COCORO」を購入してくださった方が、こんなにきれいだよとツイッターであげてくれたりすると、頑張ろうと思ったり、全国から注目をたくさんいただいている、頑張っても月に50個しか作れ

ないのですけれども、何千もきているのです。すぐには応えられないのですけれども、何年でも待ちますと言ってくださったり、みんなが支えてくれていて、ステンレス工場や、箱を作ってくれたり、デザインしてくれている方全員が、「宙COCORO」が広まったことをすごく喜んでくださっているのです、やってよかったと。

正能：

結局、「やってよかった」と思える着地ができているのは、いろいろな方を巻き込んだり、いろいろな人に協力をしてもらいながら、最終的にそこまでたどり着く佐藤さんのパワーなのかもしれませんね。

佐藤：

いつも助けられてばかりで、全部助けてもらっている人生です。

正能：

でも、佐藤さんの工夫があってこそその助けてもらうという選択肢だと私は思いました。助けてもらうためには、現状や実情を知ってもらうというのは大事。イベントや打ち合わせにお子さんを連れて行かれることも、例えば、おうちはおうち、仕事は仕事としていたら、仕事仲間も状況が分からないわけで。そうしたプライベートなところも適度にオープンにしていくということは、女性が働いたり活動したりしていく中ですごく大事なことではないかと思いました。

佐藤：

確かにそうです。店舗に絵を描くときに、何日までに描いてと言われるのですけれども、子どもが熱を出したら少し遅くなるかもしれませんとか、理解してくださいとお願いしたり言いづらいかもしれないのですけれども言ったりしていますが、それでも依頼がくればいいと。

正能：

最近、新型コロナウイルス感染症の流行でリモートワークのお仕事が増えてきて。これまでは会社で働く何とかさんとか、仕事上でしか知らなかった方の家族像などが見えるようになりました。例えばママさんでもあるチームメンバーがすごく大変な思いをして、時短で帰られてというのは何となく知っていたけれども、会議の後ろで子どもが泣いていたり、走り

回っていたり、物を壊すくらい元気だったり、私はまだ子どもがいないので、そのあたりの実感がなかったのです。しかし、そういった状況をリモート会議の中で目にすることによって、働きながら子どもを育てていくということは、こんなに大変なことなのだと分かるようになりました。そうなってくると、一緒に働く人も助けたいとか、一緒に頑張りたいとか、フォローできる場所は何でもしたいといった気持ちになるので、実は佐藤さんが自然にやられている、おうちの中と外の境目をあいまいにしていくことは、女性が働くうえで大事なのかもしれません。

続いて尾畑さんに伺います。困っていることや課題、もっとこうなったらよかったのということは何かありますかでしょうか。

尾畑：

課題というわけではないのですが、実はうちの会社はIターンが多く、この前数えたら8人いたのです。そのうちの何割かの人たちは、何かやりたいことがあって佐渡に移住しました。それが軌道に乗るまで時間もかかるし、あるいは毎日やる仕事ではないかもしれないし、そういった人たちがうちの会社で働きながら、少しお休みを多めにして、自分のやりたいことをやっているという、ワーク・ライフ・バランスではなくて、ワーク・ワーク・バランスをすごく上手にとっています。そういったことに私たちも慣れているので、明日お休みだったらあれをやっているんだね、頑張っておきたい話をするのですけれども、そういう人たちがこれから増えると思うのです。特に移住してくる人たちが増えていくのではないかと思うので、軌道に乗るまでは別のお仕事も必要でしょうから、そういったときに受け入れる側の企業としては、状況をよく理解して応援するというのも大事なのではないかと。それがきっと、移住して暮らしやすい地域になるコツなのではないかと思うので、そういう人が多いというのは、逆にそういった働き方がしやすい会社になってきているのだったらいいと思います。

正能：

なるほど。今のお話を伺ってふと考えたのは、例えば私なども副業、兼業でいろいろなお仕事をさせてもらっている中で、この働き方を前向きにとらえてくださる方がいる一方で、なぜうちの会社だけで頑張らないのかと思う方も一定数いるなということ。尾畑さんの周りでもそう思うってしまう人も一定数いるのかなと感じたのですが、何か接し方などでお考えになっていることはありますか。

尾畑：

取り組んでいることをみんなが知っていれば、なぜ休むの？ということよりも、そんなふうに進んでいるんだ、いつオープンなんだ、頑張ってるねと、自然とそういった気持ちになっていくと思うのです。それぞれのオフというか、仕事場以外のスタイルというものをみんなが共有していくというのは、基本的に大事なことかとは思いますが。

正能：

そうですね。少しでも後ろめたい気持ちがあったりすると、隠そうとしてしまって、それがまた関係性を悪くしていくといった悪循環になるので、ワーク・ワーク・バランスを保っていくには自己開示をしていくということが大事なのだらうと思います。

もう一点、女性にフォーカスして聞きたいので、お子さんがいる中で、事業を蔵元としてやられていくときに、もっとこうなっていてほしかったのにとか、こういうことに困っていたということがあったら教えてください。

尾畑：

私の娘たちは成人しているので、今は手が離れていますが、思い返すと、もっと近くにいてあげたかったと思うことばかりで、だめだったなという反省しかないのです。ただ、彼女たちに残してあげたいと思ったのは、島でお酒造りをしながら、しかし世界とつながっていけるのだと。世界中にパートナーがいるのだということをきちんと自分の代で作ってあげたいと思ってやってきました。子どものころは映画にあこがれたりして、世界のこともっと知りたいし、映画を通して世界を日本に紹介する仕事をしていたのですけれども、今は日本酒を通して佐渡という場所を世界に紹介できているので、すごく楽しいと思います。

正能：

そういった尾畑さんの様子を娘さんたちが見て、それが子どもたちのこれからの働き方や地域とのかかわり方を変えるきっかけにもなりそうだと考えました。

尾畑：

なるといいなと思います。

正能：

なるのではないのでしょうか。島で働いて世界とつながっていくというのは、本当に素敵な

ことですね。最後に、新谷さん。いろいろと新谷さんのお人柄で乗り越えてこられた部分も大きいのではないかと思いますのですが、地域とのかかわり方の中での課題や困っていることなどはありますか。

新谷：

お二人も話していたように、子どもを持つ女性が働くというのは難しいというか、大変な部分がたくさんあるのではないかと思います。私自身、農業法人時代は子どもが小さくて、子どもを野球に送った後、また畑に行って収穫してということで、土日も仕事をしていました。農業というのは朝早くから、天気によって左右されてということはありません。そういったいろいろな思いがあって、子どもというのは地域の宝だと思うのです。例えば都会ほど預ける場所がたくさんあるわけではないのですが、その分、地域の方たちが一丸となって子どもを守るという形が大事ではないかと思います。当時、そのときの社長に、子どもを連れていってもいいよと言ってもらったのです。その経験を生かして、今の会社では赤ちゃんをおんぶしながら働いたり、夏休み中だったら子どもを連れてきていいという形にしています。ママさんたちが働きやすい環境を作るとするのがいいのではないかと思います。やはりストレスを抱えてもらいたくないということがあります。地域とかかわる中で、どのようなことでも悩んだり、苦しんだりして、起業して経営者になっていろいろな問題があったときに、悩むからストレスを抱えてしまうと思うのですが、私も大きな病気をしているので、ママさんやこれから起業する人が、ストレスを抱えないで働けることを形にしていきたいと思っています。

正能：

子どもは地域の宝といったお話がありました、東京にいとそういった感覚をなかなか持てないですね。ただ、実際に私も地域にお仕事で行くと、だれだれさん家の何とかちゃんみたいな、地域みんなでその子を可愛がっていることを肌で感じることも多くあります。お母さんが一人でストレスを抱えないためにも、地域で子どもを育てていくという感覚や、頼れる場所があるという感覚をお母さんたちが持っているかどうかが大きいのだと考えました。

最後になるのですが、皆さんから一言ずつ、これから地域でいろいろな活動をやってみようと思っている女性の方々に対して、エネルギーになる言葉を頂けるとうれしいです。尾畑さんからお願いします。

尾畑：

東京にいるより地方にいるほうが 24 時間がたくさんあるような気がしています。例えば都会だったらレジャーにもものすごくエネルギーと時間をかけないととどり着けないことがあるのですが、例えばうちの蔵などだと、歩いて 30 秒ですごくきれいな夕焼けの見える海があって、30 秒でリゾートがあります。そういう意味では、ワークもライフもリゾートもすべてがかなうのが地方なのです。地域性を深めて、世界をマーケットにしたお仕事もできるので、ぜひ挑戦してもらえればと思います。

佐藤：

一人で抱え込まないで、得意なことを自分がするから、できないことはみんなに任せてやってもらえば、あれもやらなければと思うと大変なので、これは私が得意なのでやるから、ほかはお願いといった感じでやっていくとうまくいくような気がします。

新谷：

いろいろな人と協力してやるということは本当に大事なことだと思います。何かのせいにして生きていくより、毎日、おかげさまという言葉が大事だと思います。いろいろな人たちのおかげで今があって、だれかにおかげさま、ありがとうという言葉の一つ多く生きていきたいと思っています。自分がありがとうと笑顔で返すと、相手もありがとうと返してくれるし、そういったことがつながって循環していくと思います。田舎って何も無いよねとよく言われるのですが、何も無いと思うのです。ないところに新しいものを作る。ないという不便さが起業を生むのではないかと思います。私は地方のほうが可能性は無限大だと思うので、ないのではなくて、こんなにもあるのだということを皆さんに感じてもらいたいです。

正能：

ありがとうございます。それでは最後に、走馬灯タイムというものをやってみたいと思います。これは以前、とあるモデレーターの方がやっているのを見て、いいなと思って、それ以来真似している時間なのですが、今日、皆さんがお話しされたキーワードをまとめました。それを読み上げて、今日のこのセッションを思い出していただきつつ、このセッションを終わりにしたいと思っています。

起業までいくとは思っていなかった。まずは人脈づくり。豆腐屋さんからのスタート。小千谷は温かいところ。みんなが親戚。この家を絶やしたくない。1秒でも起きていられるなら絵が描きたかった。どちらもやってみようと思ったら、どちらも好きになった。酒蔵は遊

び場、嫌いじゃなかった。これは大変なことが起きたから帰ろうではなく、気になって仕方がない自分。いいときも悪いときもあったけれども、お酒っていいよねと未来を創造できるようになってからは楽しい。女性というだけで名前をおぼえてもらえる。男性か女性かよりも歳元かどうか。百年の過去があると次の百年をどうしようという考え方になる。継がないとって家業を継ぐのも第二創業もあり。あえて自分の漆のお仕事の話はしない。子どもがいるからできないではなく、子どもがいるけれどもやりたい。

小千谷弁を一生懸命おぼえた。食でつながっていた、お茶を飲む。変えられるものは私。女性目線、よそ者目線が役に立つ。イベントや打ち合わせにも子どもを連れていく。みんなが支えてくれる。軌道に乗っていくまでの別の仕事は受け入れる。取り組んでいることをオープンにする。島でお酒をつくる、でも世界とつながれる。子どもを持つこと、子どもは地域の宝。東京にいるより地域にいるほうが24時間がたくさんある。ワークもライフもリゾートもすべてがかなう。一人で抱え込まない。得意なことはやる。何かのせいにしない。おかげさま。ありがたいという言葉が多く持って生きていきたい。田舎って何もなくてないからこそ新しい物を作る。不便さが事業を作る。

心に残るキーワードをたくさんいただいた40分間でした。みなさんのお話を伺って、私自身、これからどうやっていこうか考えてみたいと思っています。本日は、貴重なお時間をありがとうございました。

4. 閉会挨拶

司会：

皆様、ありがとうございました。女性が起業したり、伝統を受け継いだりするのはとても大変なことで、躊躇してしまいそうなのですが、いきいきと働いていらっしゃる皆様の意見を聞いておきますと、そこに一歩踏み出して頑張ってみる。そして声に出してやりたいことはやりたいと言ってみる、チャレンジし続けることが大切なのだと私も思いました。地域で女性が活躍するために何が必要なのか、起業することの大変さと喜び、充実した生き方、今日はそこへ一歩踏み出すためのたくさんのヒントを得ることができた大切な時間になっていたら幸いです。

本日は長時間にわたってご視聴いただいた皆さん、ありがとうございました。講演者、ファシリテーターの皆様もありがとうございました。

以上をもちまして、「地域で活躍する女性たち」シンポジウムライブを閉会といたします。長時間にわたりありがとうございました。

以上